歴史資料室だより ②

南部氏資料室

今回は、道の駅なんぶの施設内にある「南部氏資料室」（南部氏館）を取り上げます。

南部氏

まずは「南部氏」に触れておきます。

時代は平安時代末期。甲斐の国のうち、今の南アルプス市一帯を治めた武将に、甲斐源氏の祖・新羅三郎義光のひ孫である加賀美遠光がいました。

その遠光の三男にあたるのが光行で、父の領地であった南部の地に地頭として赴任し、地名を取って、「南部三郎光行」と名乗るようになり、それが南部氏の始まりとされています。

伝承によれば、光行自身は頼朝に仕えるため、主に鎌倉に住んでいたとされ、文治5年（1189）の奥州藤原氏攻めで再び戦功を挙げ、頼朝から陸奥の国の糠部（ぬかのぶ）5郡（現在の岩手県北部から青森県南部にかけた一帯）を与えられたといわれています。

これをきっかけに南部氏の奥州進出が始まり、「奥州南部氏のルーツは山梨県南部町にあり」、といわれる由縁になっています。

南部氏はその後、本領の甲斐南部郷と新領奥州糠部の両方を治め、光行の没後は、その子孫が〝奥州南部氏〟として三戸や八戸など奥州各地に勢力を広げ、南北朝、室町、戦国の各時代を経て、江戸時代には盛岡を中心に南部藩を構え、明治維新まで奥州有数の大名として栄えました。

一方、甲斐にあっては、日蓮上人を庇護したことで知られる身延の波木井南部家が戦国末期まで続きました。しかし、本領であった南部の地では、一族が広い土地のある奥州の地に移住していったことから徐々に衰退。最終的に南部を離れてしまったことで、館跡や寺社にゆかりを残すだけとなってしまいました。

道の駅なんぶの資料室

南部家（盛岡）の家紋

資料室

南部氏資料室では、最初に南部氏の発祥から奥州へ移った経緯が紹介されています。史料としては、▽日蓮上人が文永11年（1273）の身延入山後、熱心な信者に送った手紙＝富木殿御書（ときどのごしょ）▽延慶3年（1310）に書かれた南部時長・師行・政長陳状案（訴状）▽南部氏の末裔・南部元時が嘉吉3年（1443）諏訪神社を再造営した際に名前を記した棟札（いずれもレプリカ）などが展示されています。

このうち富木殿御書には、日蓮上人が、光行の三男で波木井南部家を継いだ南部実長の招きに応じて鎌倉から身延に入山する際の行程に「十六日なんぶ」と書かれており、地名としての「なんぶ」の文字が残る最古の史料となっています。陳状案は、本領と新領に分かれるなか南部郷内の土地相続を巡る子孫たちの訴訟に関する貴重な史料で、国の重要文化財に指定されています。また、棟札は、元時が諏訪神社再造営のあと南部を離れたことから、南部氏がこの地を治めた最後の証とされています。

このほか、三戸（盛岡）、八戸（遠野）、波木井の各南部家の家系図や家紋の「向鶴（むかいつる）」が展示され、特に、南部氏発祥時の経済的背景である牧については、模型による馬の大きさの違いや、南部牧での飼育方法が移住に伴って奥州に広がり、南部馬の生産につながった経緯などが取り上げられています。

フォトフレームコーナーもあり、諏訪神社、新羅神社、妙浄寺、浄光寺などが、奥州南部氏とのかかわりを含めスライドショーで紹介されています。

令和 南部藩

南部氏に関しては、山梨、岩手、青森3県の10市町で交流が続けられています。

▽山梨県…南部町、身延町▽岩手県…盛岡市、宮古市、遠野市、二戸市▽青森県…八戸市、南部町、三戸町、七戸町

昭和59年（1974）に設立された「南部首長会議」が始まりで、平成18年（2006）に「平成・南部藩」が設立され、現在は「令和・南部藩」となっています。

事業としては▽南部氏領内視察事業（首長交流）▽南部氏ゆかり領民交流事業（市民交流）があり、最近では南部町を会場に昨年10月、3年ぶりの首長交流事業が開かれたほか、関連事業で町民参加の奥州南部藩視察研修も行われています。